

インドシナ旅日記

アンコールワットの大伽藍見学はまず、西側の正門から入り環濠を渡ります。本来なら真っすぐ西の塔門まで進むのですが、わたしたちが訪ねた時は環濠に架かる石造りの参道は改修中でした。それで参道の少し南側に掛けられた仮橋(浮橋)を渡ったのですが、浮橋特有のふわふわした感じが面白かったです。渡りきったところから再び参道に戻り、西の塔門(大塔門)をくぐり、そこから経蔵や蓮池(聖池)を見ながら、やがて十字型のテラスを通過して第1回廊の玄関口をくぐると十字回廊を経て第2回廊に至ります。そこをさらにくぐり抜けたところは内陣ともいべき空間が広がり、小さな経蔵などが配置されています。第3回廊にはいにしえの王ならば、そのまま真っすぐ上るのですが、我々現代の平民たちは中央に聳える主塔(中央祠堂)の裏側に造られた木製の仮階段から上ります。しかも安全のためにということで一度に100人までしか第3回廊には入れません。先に上った観光客が降りてきて返還したカードを受け取って登れるようになるまで、小一時間列を作って待ちました。

7. 「アンコール・ワットの回廊's-2.」

アンコール・ワットがアンコール王朝のスーリヤヴァルマン2世によって建造されたのは12世紀前半のことですが、その時はもちろんヒンドゥー教の寺院として建立され、工事期間は30年を超えたそうです。

1331年頃に現在のタイで隆盛期を迎えたアユタヤ王朝からの圧迫を受け始めると、タイとの国境に近いアンコールは放棄されて、現在のプノンペン近郊に王都が遷されました。一時は忘れ去られました。再発見され、1546年から1564年の間に未完成であった第一回廊北面などに精密な彫刻が施されています。

しかし、その後は仏教寺院へと改修され、主塔(本堂)に安置されていたヒンドゥー教の主神ヴィシュヌ神が仏像に置き換えられています。森本右京太夫が訪れた頃にはすっかり仏教寺院になっていたと思われ。ここでわたしには二つの疑問が生まれました。一つ目は「なぜ途中の多くの国や地方を飛び越してインドの宗教であるヒンドゥー教がこの地の王に信仰されたのか?」ということ。もう一つは「なぜヒンドゥー教から仏教へと改宗したのか?」ということです。アンコール・ワットの壮大さに打ちのめされながらも、わたしはその疑問を忘れることはできませんでした。

ヒンドゥー教を信奉する人口は、キリスト教、イスラム教に次いで三番目に信徒の多い宗教だそうです。それにヒンドゥー教と仏教はどうも共通の原始宗教バラモン教から分か



木製の急な階段。それでも下に見える本来の石段の方はもっと急です。この木製の階段ができるまでは、多くの観光客が足を踏み外して転落していたそうです。

れて発展した兄弟宗教のような気がします。

ただ、仏教には仏陀という創始者がいますが、ヒンドゥー教にはいません。紀元前1500年以上も前に成立したバラモン教から、主要な聖典と身分制度であるカーストを引き継いで、少しずつ教義を変化させながら今日に至っています。

本来は多神教的な教義のようですが、その後、三神一体（トリムルティ）とよばれる近世の教義になり、宇宙と世界に実存・実在の場を与えるブラフマー神、宇宙と世界の維持・平安を司るヴィシュヌ神、宇宙と世界を創造し、その寿命が尽きた時に破壊・破滅を司るシヴァ神の3大神が一体をなすと考え信奉しています。ただ、カンボジアにヒンドゥー教が入ったころには、ブラフマー神はあまり信仰されなくなっていたことが、アンコール・ワットやその他のヒンドゥー教遺跡からうかがえます。

さらに仏教がヒマラヤ山脈を避けて、アフガニスタンを周り（北伝仏教）インドから中国へ、さらに朝鮮半島や日本に伝わった行く過程で、神は化身（本地垂迹？）して、それぞれ仏教の主要な仏になっています。アフガニスタンにはアレキサンダー大王の東征によって、ギリシャ文明の彫刻技術が伝わりましたので、ヒンドゥー教の神も仏教の仏も3Dの姿を得るようになったと思われま

す。アンコール・ワットにヒンドゥー教が入ったのは12世紀に入ってからですが、そのモチベーションは、宿敵でもある隣国のアユタヤ（現在のタイ）が仏教を国教と定めたことによって対抗上高まったと言えるのではないのでしょうか。

結局、増大を続けるアユタヤの圧迫に引き下がる形で、現在のプノンペン近郊に遷都した後、アンコール・ワットは百数十年忘れられ、その後、今度は仏教施設として再建されています。シェムリアップ近郊にある遺跡の中でも、アンコール・ワットは保存状態がそれなりによかったのは、先の内戦が始まる前までは、細々ながらも仏教の僧が修行の場として住み暮らしていたからとされています。

本来ならヒンドゥー教の女神たちであるはずのアプサラのレリーフはヒンドゥー教の神々の像が撤去され、仏像に代わってもそのまま残りました。平等院鳳凰堂の壁面にある雲に乗った仏様たちを連想させますが、東大寺や興福寺にアメノウズメノミコトのレリーフや襖絵があるようなものとも言えますね。それどころか、アンコールワットの舞姫たちは、夜になると壁から抜け出してわたしたちの目の前で華麗な舞を見せてくれました。



アンコール・ワットの最上階である第3回廊から西の塔門の方角が見えています。



すべてが石造りの重厚な第1回廊の外側には、すぐそばまでジャングルが迫っています。放棄されていた14世から15世の百数十年間の間は、そのジャングルの木々に占領されていたんです。

第三回廊の高みから周辺のジャングルを見下ろした後は、急な階段を上る時より気を付けながら降り、そのまま第1回廊に戻りました。ここにもヒンドゥー教の寺院らしいレリーフが有名です。天地創造図です。ここにはヒンドゥー教の三神一体をなす神々も登場しています。大きさといい、レリーフで展開されている物語のスケールの大きさといい、できればこのレリーフだけを1日かけて見たいと思いました。



第1回廊に描かれているヒンドゥー教の天地創造図です。(一部)



シェムリアップの夜の楽しみはアプサラダンスを見ながらの食事ですが、どうゆうわけかこのレストランの名前はアマゾン・アンコールでした。



ヒンドゥー教を特徴づけるのがこのナーガと呼ばれる蛇の像です。形としてはコブラのように見えますが、頭が7つに分かれています。シヴァ神のお使いなのですが、形がそうなのでしょう。か、仏像の光背のような使われ方をしたり、神社の狛犬のように門の両脇に安置されたりしていました。天地創造図でも重要な役割をしていました。